バハイと幸福の科学の比較研究

尊田　望

＜概要＞

バハイ教は、自身の教えを他に伝えるとき、それを絶対的に正しいものとしてではなく、「互いに真理を追求するつもりで」わかちあうこと（アブドル・バハ）が奨励されている。むしろ、あらゆる宗教の信奉者らと友好の精神で交わることが義務づけられているくらいである（バハオラ、Bisharat, *Tablets of Baha'u'llah*, p.22）。

現在、日本国内には、数多くの宗教、宗派、宗教運動が起こっているが、その中でも、最近、めざましく発展し、日本中の注目を浴びている「幸福の科学」を取り上げて、バハイ教と比較しながら、その教えと実態について調査してみた。

その結果「幸福の科学」は、バハイ教と基本的に同じ宇宙観・人生観を持ち、目標・目的を有していることが判明した。ただし、教義上、重要な相違点もいくつか存在する。

今後のバハイは、「幸福の科学」を含める他の宗教運動について理解し、必要なときはそれらと協力し、またあるときは自らの立場をしっかりと守りながら、共通の目的である個人と社会の発展のために自らを奮い立たせて前進して行かなければならない。

Ⅰ．はじめに

バハイ教は、自身の教えを他に伝えるとき、それを絶対的に正しいものとしてではなく、「互いに真理を追求するつもりで」わかちあうこと（アブドル・バハ）が奨励されている。むしろ、あらゆる宗教の信奉者らと友好の精神で交わることが義務づけられているくらいである（バハオラ、Bisharat, *Tablets of Baha'u'llah*, p.22）。

現在、日本国内には、数多くの宗教、宗派、宗教運動が起こっており、よい意味でも悪い意味でも、個人と社会に大きな影響を及ぼしている。これらの宗教運動について、バハイは、上記の教えの通り、謙虚かつ公平な態度で学習・研究する必要がある。他の宗教運動について知ることは、他の宗教全般への寛容や理解を増すことにつながり、バハイそのものへの理解も深まり、また、バハイとしての反省材料にもなると思われる。

さて、そのような運動の中でも、「幸福の科学」は最近、めざましく発展し、日本中の注目を浴びている。そこで、今回は、「幸福の科学」を取り上げて、バハイと比較しながら、その教えと実態について調査してみることにする。

Ⅱ．「幸福の科学」概要

1．起源

1981年3月、大川氏が霊界から通信を受け始め、巨大な霊能力に目覚め、大いなる使命を自覚する。1985年8月、霊界通信第1巻目を世界に問う。1986年、「幸福の科学」を設立。

2．教祖：大川隆法。1956年生まれ。東京大学法学部卒後、大手総合商社に勤務。ニューヨーク大学にて国際金融論を学ぶ。1986年、退社後、「幸福の科学」を設立。自身は、九次元世界の大霊で

あるエル・カンターレ（仏陀）の意識体の一部が降臨したものとする（『太陽の法』、第6章、9部）。

3．聖典・基本書・文献

『太陽の法』（魂の性質、高次元世界、宇宙の秘密、人類史、個人の悟り、修行法など、根本的な基本書）、『永遠の法』（四次元から九次元世界までの「空間論」を説いている）、『黄金の法』（地上における神の計画の展開の経歴史と今後の予想を説いた時間論・歴史論）が三大基本書と言われる。その他、仏陀の啓示した言葉（『永遠の仏陀』、『沈黙の仏陀』など）など聖典的な性格の書物から、大川氏自身が書き下ろした一般的な紹介書、セルフ・ヘルプ的書物（ビジネス、結婚、家庭、教育など日常生活に関する指導書）などもある。さらに興味深くかつ重要な文献は、『霊言集』とよばれるもので、これらは、精神世界から物質世界へ送られて来たメッセージで、大川氏を媒介とする。過去の預言者（キリスト）、宗教家（日蓮，道元，親らん，空海，高橋信次，内村鑑三．スエーデンボルグ）、科学者（ニュートン、エジソン）、哲学者（ソクラテス、カント）などを含む他、これまでは伝説の人物でしかとらえられていなかったゼウス、天照大御神等も登場してくる。ただし、これらの霊言集は、必ずしも幸福の科学の基本書ではなく、むしろ、霊界の魂らの発言を集めたものであり、参考書である。

4．組織

「幸福の科学」自体は、宗教法人の形態を取っており、東京千代田区に事務総合本部を置く。大川氏を主宰とする。全国に12の支部がある。従来の「正会員」は、幸福の科学の書籍を10冊以上よみ、「入会願書」の審査を経て入会を認められた者とされていた。根本教典『正しい心法語』を授与され、全ての行事参加の資格を有し、月刊『幸福の科学』及び最新の情報を受ける。「誌友会員」は資格に特別な制限はなく、一部（研修界，修法など）を除く行事資格を有し、月刊『幸福の科学』及び最新情報を受ける。

しかし、最新の月刊誌（『幸福の科学』、1994年5月号、No.87、pp.36-38）によると、エル・カンターレとしての大川主宰、仏陀の説く法、仏陀サンガの三宝への帰依を会員の条件とする体制を確立する方針でいる。

活動内容は、大川主宰、善川名誉顧問、大川きょう子主宰補佐による講演界、セミナー等を開催、神理の書籍、カセット、ビデオ、小冊子、月刊『幸福の科学』、『月刊ミラクル』等を発行．神理を学ぶための「天使の学校」、初級・中級・上級資格試験、全国統一神理学検定試験などを開催．全国に支部を置き、各種祭典、支部集会、ビデオ会、講習会、集いなどの支部活動を行う。また、当会講師による会員対象の「幸福の相談室」を開設（「宗教の挑戦」巻末）。

5．普及状況

現在日本国内での会員数は、八百万を数える（『幸福の科学』、1994年5月号、No．87、p.37）。文献は百数十冊を数える。海外では、ニューヨークに支部ができている。

6．神学的教義

1)神：大川氏は、神の世界を次元という表現を用いて、説明しているが、人間が直接理解しうる領域は九次元までで、十次元以降は、その意識体が巨大になり、ますます人間の理解範囲では取り扱

えなくなるという。全ての根源である「神」は、このような次元の遥かかなたに位置し、人間の理解ではとうてい及ばない存在である（『太陽の法』、第１章、２部）。

2)預言者：

その不可知なる神の意志と教えを知るために、九次元世界に存在する「光の指導者達」が人間に導きの言葉を示す。彼らを預言者という言葉で表現してもよい。いわゆる、世界の諸宗教の創始者にあたる人物が多い。九次元世界には、10人の指導者がおり、それぞれ異なる役割を担っており、それぞれがある色を持った光線として表現されている――キリスト（愛、白色）、仏陀（慈悲、法、黄色）、モーゼ（リーダーシップ、赤色）、ゼウス及びマヌ（哲学・思想、青色）、ニュートン（科学、銀色）、ゾロアスター及びマヌ（大自然のあり方、宇宙の構造、宇宙の調和、緑色）、孔子（秩序、礼節、道徳、学問、紫色。cf日本神道の流れ）――以上が七色のプリズムを表す――　エル・ランテイ（地上にどの指導者を送るか、地球文明の計画、正義、人事担当）、マイトレーヤー（エル・ランテイの補佐役）（『永遠の法』、第６章、５部 －10部）。

3)宗教

上記のような光の指導者らが、神の意志と計画に基づいて人類に啓示した教えを「宗教」という。従って、宗教は、根本的に同じ教えであり、矛盾することはない。ただし、時と場所によりその詳細や適用部分が異なるのみである。神の意志と計画は一つだからである。

しかし、その信奉者らが後の時代に変えて、あるいはつけ加えてできあがっていった「宗教」や「宗派」は必ずしも、オリジナルとは一致しない。

また、人間が自分の考えに基づいて、あるいは、これらの正当な指導者らとは関係なしに霊界の魂らに刺激されて創始する「宗教」も、区別されるべきである（『宗教の挑戦』、第１章、６章参照）。

７．心理学的教義

1)魂の存在と性質・構造

魂（soul）とは、根源神の意識の発現体であり、神の性質を反映する、精神的アイデンティティである。肉体とは別の存在であるが、この世界に生きている間は、肉体とつながっており、肉体と相互に作用する。神の光（エネルギー）を受けて、生命を維持する（『太陽の法』、第２章、１、２部）。

心（mind/heart）は魂の中核部分であり、魂の力を表現・統制する部分である。
意志・感情・本能・理性・悟性等を司る。

魂がまだ漠然とした状態で個別化していない状態であれば、霊（spirit）とよぶときもある。意識体（consciousness）は、霊よりもさらに巨大な状態で、地球や宇宙の生命体を指すときに用いたりする。

したがって、意識（consciousness）、霊（spirit）、魂（soul）、心（mind/heart）の順で、個別化が進むと考えればよい（『幸福の原理』、第三部、３）。

九次元世界の霊は、個性を持つ意識体ではあるが、そのエネルギーの巨大さ故に三次元に肉体を持つときは、その意識の一部を使って出てくる。その意味では、この幽霊は、魂としては無数わかれることができる。八次元の如来も、分霊が可能である。七次元以下になってくると、ますます個性化、人格化が進んでくる。七次元では、原則として六人一組（互いに性質が似ている）のグルー

プをつくり、交代で三次元世界に降りてくる。六次元以下では、この六人で一体といった意識が薄れてくる（『太陽の法』、第２章、４、５部）。

原則として、六人のグループの内、次に地上に出る者が「守護霊」を務めるが、地上に出る者の使命が大きく、実現が期待されるときは、その一の人生最大の関心事を専門とする指導霊をつける（『太陽の法』、第２章、５部）。

人生の目的は、この魂を、神の教えに基づいて修行させていくことである。その修行は、個人に留まることなく、他の魂の成長、社会の発展、文化・文明の推進にもつながる。したがって、個人の精神的修行と社会全体の物質的発展とは深く関係しているのである（『永遠の法』、第１章、１－２部参照）。

この魂は、肉体が機能を停止した後も、精神世界においてその成長と活動を続ける。

2)生死観

魂は、生まれる前から、精神世界に存在し、生まれる前に人生の計画を立て、結婚や仕事等についてある程度の計画や約束をしてくるという。肉体の死後、魂は精神世界に戻り、数百年のサイクルのもとで輪廻をくりかえす。ただし、地獄（魂としての成長度が極端に遅れている状態）に住む魂には、輪廻がゆるされていない。ある程度まで成長することが条件とされている。また、八次元以上の高級霊の中には、地上に肉体を持ったことのない霊もいるという（『永遠の法』、第１章、参照）。

魂は、この地上において、その精神的修行を目的とし、精神世界を真の住処とするが、これは、物質的生活をおろそかにすることはなく、むしろ、物質的にも健全で強固であることを目標とする。ただ、物質生活に極端に愛着を持たず、こだわらないだけである。機会があれば、大いに物質的有利条件を活用し、物質文明も推進していく。よって、健康もこの精神的目的に従属するものである。

天国と地獄は、「場所」ではなく、魂自身がつくりだす、精神的状態である。精神世界へ戻った魂は、地上での修行で達した精神状態において生活を続ける。その状態は自らが醸し出すもので、それと同じ傾向にある他の魂と一緒に住むことしかできない。精神状態が乱れ、未熟であれば、そのような傾向にある魂と一緒にそのような世界を作り出す。魂が非常に発達し、成長していれば、他の魂と一緒にその環境を作り出す。前者が極端な状態を「地獄」といい、後者の極端な状態を「天国」と言うのである。それは、裁かれて行かされる場所と言うよりは、自ら悟って、あるいは自らの状態故に拒むことができずに自分で作ってしまう精神的世界なのである（『永遠の法』、第１章、『宗教の挑戦』、第４章参照）。

８．生き方

1)現代版八正道：正しく物事を見ること。正しく語ること。正しく思うこと。正しく仕事をすること。正しく生活すること。感謝すること。正しく神理を学ぶこと。正しい人生計画を持つこと。自己実現の祈りを持つこと。正しい精神統一の時間を持ち、反省し、守護霊・指導霊に感謝し、祈ること（『太陽の法』、第２章、10部）。

2)さらに、四正道：(1)他人も同じ神のもとからやってきた魂であることを悟り、自分と同じであるゆえに、人のことをよく思い、人に与える愛を実践すること。(2)神の教えを正しく理解し、魂を迷いや誤解から解放すること。(3)日々、自らの心にある錆を取り、過ちを正すという反省をすること。

(4)自らを磨いて発展させ、他人の発展の援助もし、社会そして地球全体の発展へとつなげていくこと（『幸福の原理』、第1部、7）。

根本的に、人は、まず自分の魂の修行をすることを奨励する。それから他人へ、社会へ目を向けることである。

9．文明観

1)過去：数百億年、一千億年くらいのスケールで宇宙の歴史について語る。地球文明についてのしかりで、五、六千年という従来の人類史をはるかに超越して地球文明の歴史を数億年のスケールで説明している（『太陽の法』、第1章、7－10部、第5章、「神理文明の流転」参照）。

2)現代：20世紀末には、確かに、大きな変動と試練のありうることを予言しているが、地球の文明はこれからもずっと続いていくことを確証している。今は、従来の文明が崩壊し、新しい文明が誕生する、狭間にあるとする（『黄金の法』、第6章、1部）。

3)未来：「黄金の法」では、西暦二〇〇〇年から三〇〇〇年以降の文明について予言している（『黄金の法』、第6章）。

10．日本の運命

21世紀は日本の黄金の時期となり、世界に大きな影響を及ぼしていくことが予期されている。しかし、今日本は、まだ、精神的睡眠状態にあり、その与えられた精神的使命と物質的富の使い道を知らずに右往左往している。今こそ、日本に神の教えを説き広め、真の宗教の姿を知らしめ、やがて世界中にこの神の地理の火を広げなくてはならないとする（『太陽の法』、第6章、「神理文明の流転」等）。

ノストラダムスは、「東の国にて太陽の法が説かれるとき、自分の恐怖の終末予言はその使命を終わり、新しい時代が始まる」と言う言葉を残しており、その「太陽の法」は、幸福の科学基本書の一つ「太陽の法」そのものであるとする（高次元世界からの啓示を受けながら綴られたものである）。そしてその書は、日本を中心とする大救世事業の核となるものである（以上，『太陽の法』の「まえがき」より）。

11．全般的目標

物質的生活に溺れて本来の精神的目的をわすれた人類に神の宗教の真の姿を再び知らしめると同時に、21世紀以降の新しい地球文明の計画の遂行、個人と社会の発展に必要な教えを実践し、説き広めること。

III．バハイ教との比較

1．起源：バハイ教は，バブの使命宣言（1844年、ペルシャのシラーズ、）ないしはバハオラの使命宣言（1863年、バグダッド）をもって開始されたとする。「幸福の科学よりも」およそ百数十年遡る。

2．教祖：バハオラは、1

3．聖典：
双方とも、かなり豊富な
文献が、すでに150冊を越
.00冊以上あるといわれる
ギ・エフェンディ、万国正

4．組織：「幸福の科学」
は、現在、入会の基準は、
への立場について基本的に
よみ、知識的に装備するこ
バハイの場合、地方支部は
の地域布教委員会により構
.9日毎のフィースト開催、

5．普及状況：日本には現
る。世界的には、約600万の
える。

6．神観念：バハイも同じ
一の理解を有している。

7．預言者：不可知なる神
が、それが誰か、という点
ター等の名前は、バハイで
た、孔子は、神の顕示者で
Answered Questions, Ch. 43
とするバハオラ、バブの名
がっている名前の中で、バ
こありえない。なぜなら、
を築き、大いなる働きをし
のではない）、「エホバの
ている（『永遠の法』、第
受らく地上に肉体を持つこ
ハ正義の神、裁き神 . . . 何
た（p.212）からである。バ
る芝にて語った者」であり
吉合されたのであり、彼の
3y,「長い必須の祈り」, Th

五. しかし、どのような文明であろうとも、人間が魂の修行のために転生輪廻の過程で必要な修行の場であったという事実には変わりない。
(第５章、10)

今人類はそのような転換の時期にあり、新しい文明建設に偉大な光の指導者を必要としている、というのである。それが確かに、「エル・カンターレ」の意識の出現である「幸福の科学」であるのであると述べているが、同時に、大川氏は、『宗教の挑戦』の第６章で、「新世界宗教出現の時代」、「世界宗教の中心概念」、「世界宗教の思想的条件」という見出しで、地球統合のための現代世界宗教の必要性と条件について語っている。その世界宗教が、「幸福の科学」が発展したものなのか、あるいは全く別のルートで出現し得るということをいわんとしているのか、同書でははっきりとつかめない。もし後者のケースであれば、バハイの見地とは、ますます一致してくるのである。

IIV. 結論

今回の考察では、「幸福の科学」とバハイ教とを、その根本教義や性格において大まかに比較対照してみた。大根本において、両者は一致する。しかし、いくつかの重要事項において、不一致、あるいは不明な点が残っている。あらゆる宗教と友好の精神で交わり、一刻も早く、個人と社会の精神化、幸福化、発展という同一の目的を果たしたいバハイは、これらの点について研究しなければならない。

「幸福の科学」の仕事は、バハイが日本国内で、直接できないでいる仕事をしてくれている。それは、「宗教の信用回復運動」である。明らかに、この団体は、日本を、真の宗教の姿に近づける努力をし、成果を上げていると言える。双方とも真実の立場を取っているという積極的な見地からすると、「幸福の科学」は、バハイ教が広まる前の、基盤作りをしていると言えよう。ちょうど、中国で、共産主義思想が、腐敗し廃れた宗教を一掃し、健全な宗教を受け入れる準備をしてきたのと同じように。

現在の日本のバハイの状況――その数的規模、文献の量、言語的障壁――などからすると、バハイが急速に広まることは非常に困難に思える。しかし、日本が精神的栄養と導きを必要としていることは明きらかである。ある者は、海外へ進出して、それを得、ある者は、既存の宗教や新興宗教を通してそれに預かり、ある者は、独自の哲学でもってそれを満たしているかも知れない。そして、ある者は、バハイを通してそれを実行することができている。しかし、総登録者数が2,500人ということは、日本人口のほぼ全員がバハイ教を知らないといっても等しい状態なのである。そうであれば、当然、天上界から日本を救わねばならないという運動が起きて、日本の中から「幸福の科学」といった団体が設立されてもなんら不思議はないのである。

もし、上記の見方――つまり双方が真実という立場――を取るならば、日本のバハイは、「幸福の科学」を神の大計画の一部として見なし、謙虚にその内容について学習し、参考にしなけれなばなるまい。

もし、上記の仮定が確立できなければ、探求は振り出しに戻ることになる。

しかし、「あらゆる宗教と友好の精神で交わり」、「共に真理を探求するつもりで」というバハイの教えに忠実であるならば、バハイは、いかなる宗教運動からも、よいことならば何でも学ぶ態度が必要である。「幸福の科学」は、大いにそのような「よい点」を提供してくれる運動である言えよう。

それにしても、これほど、目的や目標において一致していると同時に、根本的教義において幾らか矛盾があることは不思議と言わざるを得ない。バハイの中枢的教義である宗教的寛容さや科学と

の調和と言った重要な教えを共有するこの運動をいかに解し、いかに接触していくかは、バハイとしても真剣に考えてみたい課題である。

自身の宗教に忠実であることと、他の宗教から学ぼうとすることは合い入れない行為ではない。自身の宗教の目的・方法・規則に忠実であるという強固さを持って、他から学ぶ謙虚さと柔軟性は、有し得るのである。このような比較研究は、今後も、バハイにとってよい刺激となり、勉強となると思われる。

参考文献

Abdu'l-Baha. *Some Answered Questions.* Trans. L. Clifford-Barney. Wilmette: Baha'i Publishing Trust, 1985.

Baha'i Prayers. Trans. Shoghi Effendi. Wilmette: Baha'i Publishing Trust, 1982.

Baha'u'llah. *Gleanings from the Writings of Baha'u'llah.* Trans. Shoghi Effendi. Wilmette: Baha'i Publishing Trust, 1983.

---. *Tablets of Baha'u'llah.* Trans. Habib Taherzadeh. Haifa: Baha'i World Centre, 1982.

大川　きょう子.「母としての幸福」. 幸福の科学出版, 1994.

大川　隆法.『アラーの大警告』. 幸福の科学出版, 1991.

---.『内村鑑三霊示集』. 土屋書店, 1991.

---.『永遠の仏陀』. 幸福の科学出版, 1991.

---.『永遠の法』. 角川文庫, 1990.

---.『黄金の法』. 角川文庫, 1990.

---.『現代成功哲学』. 土屋書店, 1993.

---.『幸福の原理：救世主立つ』. 幸福の科学出版, 1990.

---.『幸福のつかみ方』. 幸福の科学出版, 1992.

---.『宗教の挑戦』. 幸福の科学出版, .

---.『常勝思考』. 幸福の科学出版1989, .

---.『常勝思考, Part 2』. 幸福の科学出版, 1990.

---.『新・神霊界入門』. 幸福の科学出版, 1991.

---.『神理学要論』. 幸福の科学出版, 1990.

---.『神理文明の流転』. 幸福の科学出版, 1992.

---.『人生の王道を語る』. 幸福の科学出版, 1993.

---.『太陽の法』. 角川文庫, 1990.

---.『高橋信次の新幸福論』. 幸福の科学出版, 1991.

---.『ノストラダムス：戦慄の啓示』. 幸福の科学出版, 1991.

---.『発展思考』. 幸福の科学出版, 1991.

---.『フランクリー・スピーキング』. 幸福の科学出版, 1993.

Japan Will Turn Ablaze! Comp. B. Sims. Tokyo: Baha'i Publishing Trust.

『幸福の科学』. 1994年5月号, No. 87.

Shoghi Effendi. *God Passes By.* Wilmette: Baha'i Publishing Trust.

善川　三郎.『ソクラテスの霊言』. 土屋書店, 1990.